

日時：2019 年 6 月 27 日(木) 16：30～17：30

インタビュアー：鈴木悠大(社会・地域文化学 3 年) 藤田啓吾(社会・地域文化学 3 年)

インタビュイー：清水香先生(社会・地域文化学プログラム助教)

研究内容について

学生：それではまず、先生の研究内容について教えてください。

先生：私の専門は考古学です。アイヌ文化や江戸時代の木製品から当時の技術を復元したり、モノの流通や人の交流によって、文化が変容していく過程を追究したりしています。

現在は主に、北海道のアイヌ文化に外から持ち込まれた漆製品、副葬品になった漆碗や刀剣類などがどこで製作されて、どのように持ち込まれたのか、またそういった物流がそれぞれの文化に与えた影響について研究しています。

講義について

学生：新潟大学ではどのような講義を行っているのですか。

先生：私は考古学実習を担当しています。考古学実習 A・B では、室内で発掘調査に必要な技術について、主に測量や実測、写真撮影、報告書作成に関して、道具・機材の使い方からアウトプットの方法まで、併せて発掘調査に関連する話題として、各時代の遺構・遺物や、研究機関・大学・行政などで行われている調査の現状を紹介しています。

考古学実習 C・D では実際に野外で測量や発掘調査を行います。2019 年度は、5 月に実習 C として佐渡の西三川砂金山遺跡の測量調査(写真)、8 月には同遺跡と五泉市の新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター村松ステーション旧陸軍関連施設跡の発掘調査を予定しています。



考古学実習の様子①



考古学実習の様子②

先生の経歴について

学生：先生のご経歴について教えてください。

先生：出身は富山県です。高校を卒業してから上京し、アルバイトで始めた遺跡発掘が面白くて、勉強したいと思うようになり、大学に入って考古学を専攻しました。大学・大学院は國學院大學です。卒論では縄文時代の樹種選択について、修士・博士論文ではアイヌ文化の献酒儀礼に関する研究をしました。ずっと遺跡調査会で働きながら大学に通っていたので、遺跡から出土した縄文土器などを大学の先生に見てもらい、なんてことが日常的にあって、これはいいなど。

学生：なるほど…大学卒業後はどうされましたか。

先生：大学を出てからは、大学の埋蔵文化財調査室、民間の遺跡調査会社なんかを転々としていました。ここに来る直前は東京都埋蔵文化財センターで発掘調査に携わっていました。なんだかずっと遺跡ばかりのようですが、子どもの頃は年号を覚えなくてはならない歴史というジャンルが大嫌いだったので、日本に考古学者がいるということも知らなかったぐらいです。とにかく SF に出てくるような目新しいものが好きで、ウインドウズがない時代でしたが、中学生での女の子が欲しいようなものではなく、パソコンやワープロ、カメラやコピー機、ゲーム機で遊んでいました。アニメや漫画、小説、映画はジャンルを問わずに見ていました。これらに関しては今もそうですね。

20 代の頃はアルバイトをしながら登山をしたり、外国旅行に行ったり、大学に入る前には北海道の牧場で 1 年半ほど働きました。思い返せば、ほとんど本や人の影響で、植村直己『青春を山に賭けて』で登山、沢木耕太郎の『深夜特急』で外国旅行、ジェイムズ・ヘリオットの『ヘリオット先生奮戦記』で牧場とか。特に外国旅行では、異文化に親しみを持つようになって、そのうち日本文化にも興味を持ち始めました。私が研究対象であるアイヌ文化

を紹介するのは、翻って日本文化にも興味を持ってほしいという思いもあります。



アルバイトの遺跡発掘調査現場の事務所内の様子
矢印の女性が当時の清水先生

先生の学生時代について

学生：先生はどのような学生時代を過ごされましたか。

先生：中高生の時はとにかく本ばかり読んでいました。ジャンルはオカルトから SF、学術書までなんでも興味を持ったものを手あたり次第、という感じです。インターネットがまだパソコン通信だった時代なので、知らないことをいつでもなんでも教えてくれる「先生」がいればいいのにと、なのでネットが発達した現在は、夢が叶ったと言えるのかもしれません。また、動物が好きで、家では犬や猫、鳥、リス、いろいろ飼っていました。でも、小さな村で育ったからかもしれませんが、他人と話すのがとても苦手で、人がなにを考えているのか、よく分からないと思っていました。それよりも説明のある本や行動でわかる動物と接するほうが楽だったんでしょうね。今はうるさいぐらいに話すほうですが、20 代の頃は人とうまく話せない人、という風に見られていたと思います。

学部生（二部）の頃は、基本的に月曜から土曜の日中は遺跡調査会でアルバイト、夜は授業、日曜日はレポートという毎日でした。一日中、私が知らないことを誰かが教えてくれるので、とても楽しかったという記憶があります。学部生の頃は研究者になろう、というかなれるとは思っていませんでした。でもアルバイト先ではいろんな大学の研究者と出会う機会があって、彼らが持っている知識とスキル、自分で謎を解く能力があったら、もっと面白いことができるに違いないという欲だけで、大学院に行って研究を続けることにしました。

もちろん、将来どうなるかわからない不安はありましたが、食べていくぐらいはなんとかなると思って研究を続けていました。非常勤や契約社員として、大学の調査室や民間調査会社

を転々とする日々は、好きなことをして、のたれ死ぬのも人生と割り切っていたこと、一方では、研究で食べられる日が来るかもという希望を持っていたこと、両方があったからやってこられたんだと思います。

学生：本を読んで過ごされたと仰っていましたが、私たち学生や高校生におすすめの本はありますか。

先生：いっぱいあるなあ…『宇宙船ビーグル号の冒険』って知ってる？

学生：ああ…わからないです…。

先生：宇宙船ビーグル号に乗っている人たちがいて、その人たちは専門に特化した研究者たち、そのような人たちが問題解決を強いられた際にどのように対処するのか、っていう話なんですけど。ここで肝になるのが、研究者たちは専門に特化しすぎているから総合的に問題解決ができない、でもそこに研究者たちをコーディネートする存在がいる。専門家たち皆をまとめて問題解決に導くことができる人にすごく惹かれたんです。多様な価値観、様々な考え方を持った人々と一緒に上手くやっていくためにどうすればよいか、そんな人たちがみんな生きていくために力を合わせて問題に対処していく、という話で、古典とっていい作品ですが印象に残っています。考古学では『MASTER KEATON』、マンガだから絵があるし、イメージしやすいと思う。

私たちへのメッセージ

学生：それでは最後に、私たち学生や高校生に向けてメッセージをお願いします。

先生：これまでの人生で得た私の教訓は、自分を良く見せようとするようなプライドを持たない。新しいことに挑戦するときは、なるべく何度も失敗しておく。倒れても、起き上がる方法を、無駄だとしても複数用意する。今は自分を守っていても、必要な時には外へ出て戦えるように「武器」を整えておく。私の「武器」はこれまでの経験と知識、好奇心、あとは無くさないように心がけている「野生」でしょうか。自分は地球上に住む動物の一種だという認識は、生きていくのに必要だと思っています。

自分の能力や経験が足りなければ失敗するのは当たり前なのですが、その経験から次はどうしたらいいだろう、と工夫が生まれて、思わぬ成功につながることもあります。失敗しても恥ずかしいと思わないでチャレンジしてほしい。私は失敗ばかりしてきたので、その経験を伝えることで、少しでもみんながその失敗を回避できればいいと思っています。

また、研究者を目指す院生には、なるべく学外の雑誌に投稿、発表をすること。完璧を目指さずに途中経過として研究を発表しつつけていくこと。これは尊敬する先生から教えていただいたことです。学部生だった頃、藤本強先生が「自分はバトンを次に渡す役割」とおっしゃったのが記憶に残っています。当時活躍されていた有名な考古学の教授が、こんな心境になれるのかと驚きましたが、今はその気持ちがどのようなものだったのか、少し分かるような気がします。私自身は、全く予想していなかった未来ですが、だからこそ面白いんじゃないでしょうか。

いろんな世界を見て、いろんな人に会って、自分の中に多様な価値観を受け入れる器を持ってください。そして遠くの人は無理でも、隣で困っている人を手助けできるぐらいの余裕を持って生きられれば、将来もっと遠くへ行って、面白いことに出会えるはずです。

インタビューを終えて

小学生の頃は歴史を勉強することが大嫌いだった先生が、研究者になるまで没頭してしまうほどの魅力というものが考古学にはあることを感じました。インタビュー中、先生のお言葉で心が打たれる場面が多々ありました。特に「失敗しても恥ずかしいと思わないでチャレンジしてほしい」というメッセージが印象深く、大学生活は勿論、社会人になっても通ずる重要なことであり、この意識を常に持って日々の生活を送っていこうと思いました。



アイヌの衣装を試着する清水先生